M-3-4-1

資料名　大陸旅行の道しるべ　滿洲の巻

出所　滿鐵小樽鮮滿支案内所

作成年　19410828

寄贈者

受入

注記　35P 21×15cm

大陸旅行の道しるべ

滿洲の巻

昭和　年　月

昭和十六年八月

大陸旅行の道しるべ

（滿洲の卷）

滿鐵小樽鮮滿支案內所

業務案內

一、滿鮮支案內所は南滿洲鐵道株式會社及華北交通株式會社が「日本朝野の大陸への認識を求め之が旅客又は貨物の輸送の便宜を計るため」に設けてゐる國策的奉仕機關であります。

一、鮮滿支地方の產業經濟、交通其他事情紹介、旅行の斡旋、旅行案內記贈呈、鮮滿支荷物運送及通關に關する說明を無手數料で致します。

一、鮮滿支事情の出張講演、映畫會展覽會資料及映畫の貸出、刊行物に依る紹介宣傳を無手數料で致します。

一、鮮滿支案內所は小樽、東京、大阪、名古屋、新潟、敦賀、門司、下ノ關、長崎の九都市に在り小樽は北海道、樺太を受持區域として前揭の業務を取扱ひ致します。

滿鐵鮮滿支案內所

小樽	稻穗町東六丁目	電四四七七五五一〇
東京	京橋區銀座二ノ一	電京橋三二二八八七二二七二一
大阪	東區堺筋安土町	電本町一一一七七七八〇〇四一〇
名古屋	中區榮町一ノ一〇	電本局四四四七七七一一一三二一
新潟	古町通六	電二二九七三八九八
敦賀	驛前大通	電四一八
門司	門司稅關前	電三二二一四一四七一〇七三
下ノ關	關驛前	電一九六二
長崎	萬屋町七九	電四七八八

目次

はしがき
滿洲の概念
滿鐵概觀 ……一

◉滿洲の四季 ……一
◉服裝と携帶品 ……五
◉各種の制限と手續 ……五
◆稅關の檢査 ……五
◆特別地區旅行に就て ……六
◆携帶金其他の制限 ……七
◆携帶品の證明 ……七
◉視察の順路 ……八
◆札幌から一路新潟へ ……八
◆日本海航路に依つて ……九
◆上陸第一歩羅津 ……九
◆圖佳線に沿ふて ……一〇
◆鮮滿の國境圖們 ……一二
◆東滿新興の都牡丹江と佳木斯 ……一二
◆牡丹江 ……一三
◆佳木斯 ……一三
◆二千噸級の大河川で松花江を上る ……一三
◆哈爾濱 ……一四
◆哈爾濱の觀光箇所 ……一六
◆露西亞寺院 ……一七
◆ハルビンの味覺 ……一九
◆松花江 ……二一
◆國都新京 ……二二
◆新京近郊の戰蹟 ……二三
◆吉林 ……二三
◆奉天 ……二三
◆奉天の同善堂 ……二五
◆炭都撫順 ……二六
◆承德 ……二七
◆大連 ……二七
◆大連の地方色 ……二九
◆大連の小盗兒市場を見る ……二九
◆大連より旅順へ ……二九
◆旅順 ……二九
◉支那料理と芝居 ……二九

附錄

◉滿洲事變の發端中村、井杉兩志士の遭難 ……二九

新京、大同廣場

木村伊兵衛作

りんりんと鈴の音ひびき
りんりんと鈴の音慄え
夏の眞晝のひそけき都心
いづかたに向ふ馬車ぞも
ひたぶるに駈りも止まず
聳え立つ五層の大厦
その盡くる地平のかなた
ひそかにも雲のうごくや

はしがき

一、北海道と滿洲殊に北滿とは似て居て近い。軍都旭川と首都新京とは緯度が同じである氣候は寒さも暑さも今一歩である。其の歴史的宿命に於ても島と大陸と六十年の差こそあれ我大和民族が露國の南進政策に對抗して鍬と銃とで開拓を進め、北邊防共の爲に苦闘を續け、一は屯田兵制と拓殖計畫に依り一は王道國家建設を理想とする開拓團制とに於て共に東洋永遠の平和の爲め發展苦闘の歴史と理想は同じであり、相互に現實に役立つ資料を多分に持合せて居るものと思ふ。

二、東亞共榮圏確立の爲め大陸の役割は今更申す迄もなく、國防上に於ても經濟上に於ても我日本と不可分の關係にして日本の經營參加なくして大陸の平和と繁榮の招來なき如く之と離れて日本の繁榮も亦考へられない。東亞永遠の平和と繁榮は之が圏内諸族の相互認識に依る充分なる理解を俟ち、始めて完きを得ると考へられ殊に支那事變の解決に於て然りと思ふ。

之が爲には百聞一見に如かずの言の如く、相互の來往を繁くし直接に眼を以つて視て認識を深める事が至當且つ緊要の事と思はるも現實に於ては容易なる事にあらず。

三、如上の意味に於て殊に時局の關係上各種の旅行案内書の頒布が從來の如く豊富に且つ容易にとは考へられず、著しく窮屈而も困難になると思はる、爲に本しるべを從來の此の種パンフレット類の收錄として發行參考に資すると共に毎年度初内容を新にして其の責を果し度と思ふ。

—順次御回覽を乞ふ—

昭和十六年八月二十日

滿鐵小樽鮮滿支案内所長

白川義隆

滿洲の概念

位置 東經百十五度二十分—百三十五度二十分
北緯 三十九度四十分— 五十三度五十分
（北海道北端—岩手縣等緯度）

面積 百三十万三千百四十三平方粁
日本の約二倍
日本の總面積六十七万五千平方粁

人口 三千九百四十五万四千人（康德六年）
滿洲人 總人口の九割五分三厘
朝鮮人 同 二分九厘
日本內地人 同 一分六厘
外國人 同 二厘

耕地 可耕地 五千万陌
既耕地 一千八百五十万陌（康德四年）

製鹽 二十二万三千瓲（康德五年）

鐵鑛 二十七億瓲（推定）

石炭 二百億瓲（推定）

金鑛 五十七億瓦（推定）

林産 立木蓄積量 三十二億石
産出量 七百五十万石（康德四年）

家畜 一千三百万頭

農産 二千万瓲

貿易 輸出 七億六千六百万圓
輸入 十八億一千六百万圓（康德六年）

鐵道 一万一千粁（康德七年滿鐵所管）

自動車 二万五千粁（康德七年滿鐵所管）

江運 五千粁（康德七年）

皇紀	西暦	昭和	康德
2591	1931	6	一
2592	1932	7	大同 1
2593	1933	8	2
2594	1934	9	康德 1
2595	1935	10	2
2596	1936	11	3
2597	1937	12	4
2598	1938	13	5
2599	1939	14	6
2600	1940	15	7
2601	1941	16	8

滿鐵概觀

滿鐵は嚴然たる日本の國策遂行機關であるが日滿一體不可分の關係より滿洲國の發展的一翼でもある。本社を大連、支社を東京、新京に事務所を上海、紐育、伯林、大阪に置く

◆社員 二〇万人

◆資本金 總額 一四億圓
社內投資 三八％ 八—九億圓
社外投資 四九％ 一二億圓

◆事業 交通部門 鐵道 一万一千有余粁
自動車 二万有余粁
水運 五千粁
港灣 大連、旅順、營口、安東、雄基、羅津、河北、壺蘆島、埠頭

鑛工業部門 撫順炭鑛を中心し、煙台、瓦房店、蛟河、老頭溝の五箇所で外に製油工場、石炭液化工場、製鐵工場を有す。

調査部門 本社調査部は大連、東京、新京、奉天、上海或は北京等の現地調査機關を連絡統制し、國家に代り東亞新秩序建設に必要なる調査と、滿鐵の社業に必要なる調査を行つてゐる。

其の他 倉庫、旅館の經營

事務擔當者 二千名
經費 七五〇万圓

◆文化事業

滿洲資源館、中央試驗所之に屬す。

教育施設—滿洲醫科大學、南滿洲工業專門學校、高等技術員養成所、滿洲中學堂、營口商業實習所、大連、奉天、哈爾濱各圖書館

農林施設—苗圃、種畜場、採種場、農事修練所、土們嶺造林所、綏芬河農園管理所、王楊機械農場、哈爾濱農事育成場、滿洲林業事務所

商工施設—哈爾濱汽水製造所、海拉爾洗毛場其他鑛產所有區の開發、國內河川魚の利用加工の奬勵、土地保管、貸付、移民活動に對する助成

衛生施設—奉天醫科大學を先驅として奉天、新京、哈爾濱、齊々哈爾、錦州に鐵路學院を經營し沿線主要地にはその分院又は診療所を設く

愛路事業—鐵道自警村、滿洲開拓青年義勇隊滿鐵訓練所

◆滿鐵の關係會社

昭和十六年三月末現在の滿鐵の關係會社は六五社、公稱資本金大約一八億四千六百万圓、拂込資本金一三億三千万圓、滿鐵引受四億一百万圓、滿鐵拂込額二億九千一百万に達してゐる。

◆社員の福祉自治機關

社員共濟制度、滿鐵社員會、滿鐵生計組合

◉滿洲の四季

春—四月發芽の候（冬着）五月開花及び六月新綠の候（合着、薄手外套、夏着）で櫻、桃、杏、胡藤等の花が次々へと咲き亂れ御花畑の中を行く樣で爽快な旅行が續けられる。

夏—七月、八月は雨季に入るが大陸氣候の影響から空氣は乾燥してゐる爲に內地の如く連日じめ〳〵とした細雨や鬱陶しきことはなく降雨のあとはさらりとした氣分で非常に過しよく隨つて洋傘の必要は認めない、殊に夕方から朝にかけての涼味は滿洲ならでは味はへぬ氣分である。（夏仕度レインコート持參が便利）

秋—九月下旬から十月一杯（合着、薄外套）暑からず寒からず所謂滿洲晴で連日澄みわたる碧空に地は一渺紅葉に彩られ、曠野千里の大觀は又格別の味がある。

冬—十一月から翌年三月まで（冬服、厚外套）は結氷期で奥地は零下二、三十度に達する地方もあるが、日中の間は比較的過ごしよく又三寒四溫と云つて、寒さが三日續けば次には暖い日が四日續くといふ樣に自然の調和に依る氣候の循環が極めて規則的なので、寒さも案外凌ぎよく、殊に建築の樣式や暖房裝置は耐寒的に遺憾なく完備され、室內にあつては全く冬知らずであると言つても過言ではない。

◉服裝と携帶品

服裝は四季を通じて洋服が總ての點で望ましい、嚴寒期奥地の旅行でないかぎり概ね內地のまゝで充分で、冬の旅行でも厚手の外套を用意すれば、殊更防寒具の必要はない。雨も內地に比較すれば極めて少いから、雨期と云はれる夏でも洋傘を携行するよりはレインコートの方が夜汽車などの冷氣に備へて便利である。

携帶品としては內地の旅行に較べて特別の相異はないが、旅の常備藥として、水あたり、食あたりの豫防藥位は用意した方がよいであらう。その他大概の品物は行く先々で間に合ふので、嵩張つたり荷厄介になるものは可成避け、着がへのワイシヤツ類も滿洲の旅館では一晩でクリーニングして呉れるので澤山携帶するには及ばない手荷物は小さな包みを幾つにもせず、自分で運搬し得る程度の鞄一箇又はリユックサックに纏める方がよい。

◉各種の制限と手續

國防上、治安上、又は產業保護の見地より或は旅行者の身邊保護の目的から入國の際に稅關の檢査、軍事特別地帶旅行手續、携帶品携帶金の制限等が設けられておるので、旅行者は豫め關係事項に就て豫備知識を必要とする。

稅關の檢査

日本と滿洲に輸入される品物は夫々輸入稅を課せられるのが原則であつて、土產に持ち歸る萬年筆一本に對して課稅されても旅客としては止むを得ない譯であるが、稅關は輸出入禁制品その他の正當なる輸入を保護する爲に檢査をするので、殊に旅行者が土產に持ち歸る程度の些少の品物に對しては、極めて寬大である。

通關の秘訣は「正直なる申告」であつて、事實を僞つたり、又はかくすやうなことがあると反つてとんでもない結果を招く虞があるから、聞かれたことは卒直に回答しなければならぬ。

イ、大連から大阪商船定期船で、門司又は神戸に向ふ場合、携帶品は船中で、託送手荷物（チッキ預けの荷物）は門司又は神戸稅關で日本稅關の檢査がある。

ロ、內地から大連に行く場合には大連は自由港であるから關東州內着の場合には稅關檢査はない。

ハ、內地から大阪商船經由の連絡切符で滿洲國內（關東州內着を除く）に向け發送した託送手荷物は大連驛手小荷物檢査所で稅關檢査に立會はねばならない。

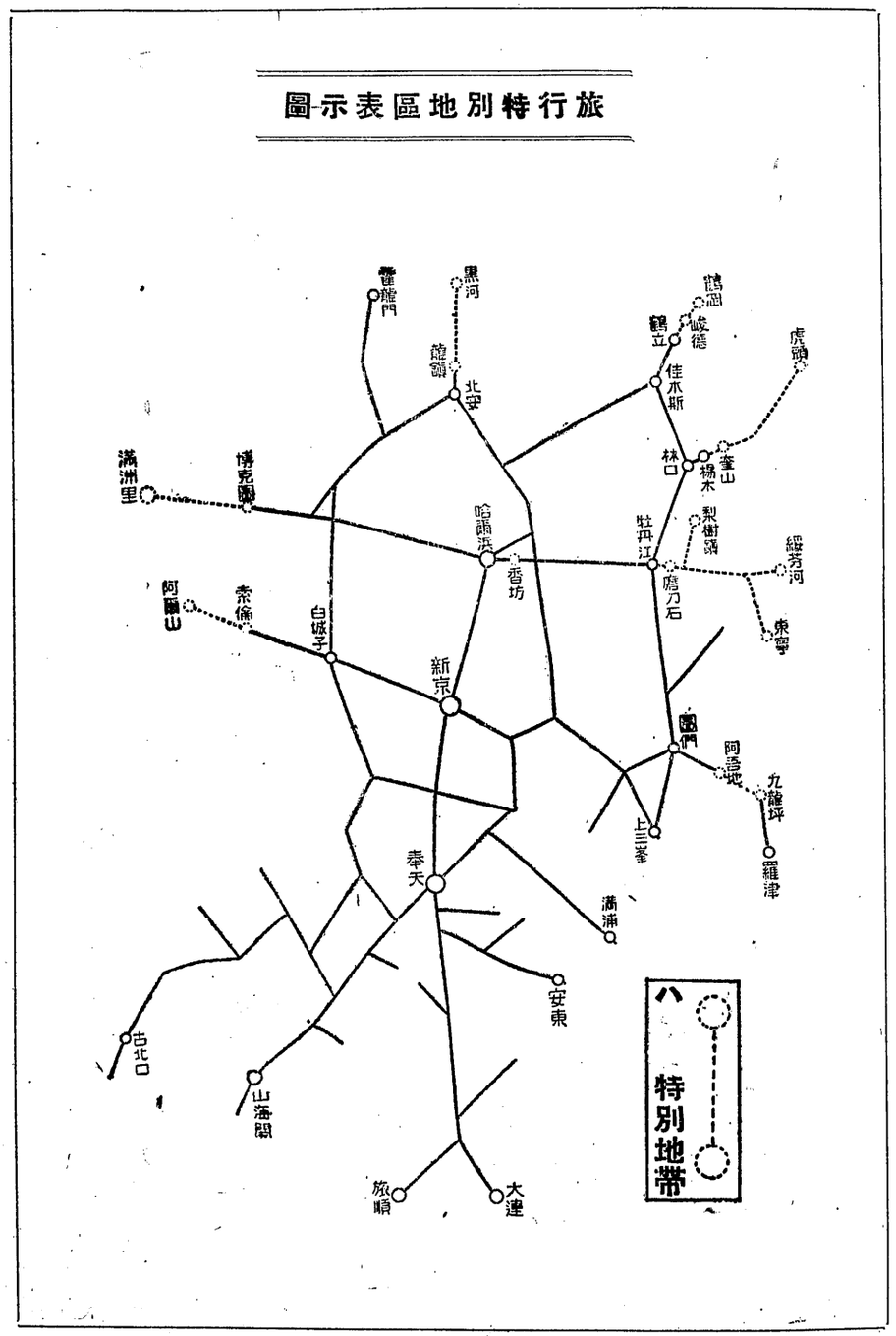
ニ、關釜連絡船及日本海航路による場合は往復路とも船內で稅關の簡單な檢査があります。

ホ、鮮滿の國境、安東、圖們又は上三峰を通過する場合は、列車內持込の携帶品は車內で、託送手荷物は驛ホームの稅關檢査所で朝鮮及滿洲稅關の檢査があるから、必ず通關に立會はねばならない。託送手荷物を先送した場合には、先づ列車內で携帶品の通關を濟ましてから直に驛ホームの檢査で係員に託送手荷物の通關が濟んで居るか否かを確め、すんでゐないときは合符を提示して立會を要する。

ヘ、大連驛から滿洲國內（普蘭店驛以北の關東州外）に入る場合には大連驛手小荷物檢査所で携帶品及託送手荷物の滿洲國稅關檢査を受けねばならない。滿洲國から關東州に入る場合は關東州境の列車中で煙草と酒類に對して關東州廳日本官吏の簡易な檢査が行はれる。一般旅行者の手荷物（商品又は商賣道具を除く）は特殊の物を除いて免稅して呉れる。

煙草は自用と認められた場合に限り、左記の數量以內免稅されるが、必ず檢査濟の證印（內地と朝鮮間を除く）を受けねばならない。

紙卷……五〇本まで
葉卷……二〇本まで　但し一人につき何れか一種に限られ葉卷紙卷兩方の場合は各々その半量
刻……一五匁まで



◆特別地區旅行に就て

滿洲國內に於て左の地域を旅行する場合は、內務省令第一〇號滿洲國特別地區旅行證明規則に依り居住地警察署長交附の旅行許可證明書を要す。

但し軍人軍屬其の他官公吏にして正規の服裝を爲せる者或は所屬長の發給した之が證明書を携帶せらるゝ場合及十四歲未滿の者は之が旅行證明書は不要である。

一、滿洲國特別地區

間島省　琿春縣

牡丹江省　東寧縣、穆稜縣、綏陽縣

東安省　密山縣、虎林縣、饒河縣、豐滿縣大和村

三江省　蘿北縣、綏濱縣、同江縣、撫遠縣、富錦縣、鶴立縣

（但し鶴立沙河以南を除く）

北安省　北安縣（但し訥謨爾河以南を除く）

黑河省　全部

興安北省　全部

興安東省　布特哈旗火燎溝及綽爾河上流附近、喜札嘎爾旗

二、右特別地區に含まるゝ鐵道驛名は左の通とす

1、間島省琿春縣

（琿春）

2、牡丹江省　東寧縣、穆稜縣、綏陽縣

イ、濱綏線

（磨刀石、代馬溝、穆稜、伊林、下城子、馬橋河、太嶺、細麟河、綏西、河西、綏陽、綏芥河）

ロ、綏寧線

（河東、紫陽、沙洞、道河、洞庭、城子溝、東寧）

ハ、興寧線

（狼溪、黑營、老黑山、羅圈、肚西、神洞）

ニ、梨樹線

（下城子、第二下城子、舊三道河、八面通、亮子河、梨樹鎭）

3、東安省　密山縣、虎林縣、饒河縣、寶清縣大和村

虎林線

（奎山、麻山、青龍、蘭嶺、滴道、鷄西、平陽、東海、永安庄內、黑臺、連珠山、西東安、東安、斐德、興凱、楊崗、湖北、輝崔、寶東、虎林、香鶴、清和、水克、月牙、虎頭）

4、三江省　蘿北縣、綏濱縣、同江縣、撫遠縣、富錦縣、鶴立縣

（但し鶴立沙河以南を除く）

鶴崗線　（峻德、鶴崗）

5、北安省　北安縣（但し訥謨爾以南を除く）

北黑線

（龍鎭、尾山、龍門、小興安、辰清、清溪）

6、黑河省全部
北黑線
（孫吳、北孫吳、額雨、朝水、璦琿、黃金子、神武屯、黑河）
7、興安北省全部
8、興安東省　布特哈旗火燎溝及綽爾河上流附近、喜札嘎爾旗
イ、濱州線
（博克圖、興安、伊列克得、烏奴耳、免渡河、牙克石、扎羅木得、哈克、海拉爾、烏固諾爾、完工、赫爾洪得、嵯崗、扎來諾爾、滿洲里）
ロ、白阿線
（索倫、西口、五叉溝、牛汾臺、白狼、阿爾山）

三、滿洲國特別地區旅行證明願手續

1、提出書類　戸籍謄、抄本　一通
2、名刺型寫眞（無帽半身六ヶ月以內）　二枚
家族同伴の場合は家族全員にて撮影のもの二枚
3、證明願　二通

第　號
滿洲國特別地區旅行證明願（要式）

一、本籍	氏名
一、現住所	成年月日
一、戸主トノ續柄	性別
一、職業	
一、旅行ノ目的	
一、旅行經路及行先地	
一、旅行經間	自　年　月　日　至　年　月　日
一、同伴者氏名	成年月日　性別（同伴者アルトキニ限ル）

右之通旅行致度ニ付御證明相成度寫眞添附此段願出候也
年　月　日
右　氏　名　㊞
警察署長殿

印寫眞

◆携帶金其他の制限

滿洲を旅行する場合は旅費として五百圓相當額以內は携帶は自由であるが、五百圓を超ゆる場合は外國爲替管理法の定むるところに因り大藏大臣の許可を必要とするのであるが、當北海道に於ては日本銀行小樽支店限りにて簡單に其の手續は濟まされるから至極便利である。又百圓券の携行も同法により絕對に許可されないのである。

其の他金製品、時計用金鎖、金指輪等の如く大部分が金地金に依りたるものは原則として携行を許されないが、萬年筆、赤銅製品、金張物、金鍍金物の極少量の金を用ひたるものの携帶は自由である。

◆携帶品の證明

內地から携帶される寫眞機、双眼鏡等の高價品は和製のものを除いては歸國の際新舊に拘らず輸入品と看做されて課稅される虞れがあるから、豫め左記の如き携帶品明細書を作成し左記の稅關箇所で携帶證明を受けて置かねばならぬ。

一、海路大連上陸の場合は神戸又は門司稅關で
一、釜山上陸、朝鮮經由の場合は安東驛構內新義州稅關出張所で
一、淸津、羅津、雄基上陸、朝鮮經由の場合は上三峰驛又は圖們驛內稅關出張所で

寫眞機（双眼鏡）携帶明細書は住所氏名の外、品名、種類（型）、品質（新古別）、生產地、數量、價格、レンズ番號、焦點距離等を記載するのである。

◉視察の順路

視察の順路は旅行者の目的に依つて樣々であらうが、北海道から滿洲の主要地を一巡して各種の事情を究めたいならば、先づ日滿を繫ぐ最捷徑路として撰ばれた新潟發の日本海航路に依るを第一とし北鮮の國際港羅津に上陸、夫より東滿の新興都市牡丹江、更に北上佳木斯を經て北滿唯一の都、哈爾濱に至り、此處より南下し國都新京を訪ね、次いで古都吉林の風致を賞で更に南下して工業の樞要地奉天及び炭都撫順を視察し、更に熱河の秘境承德に古代文化の遺跡を探り、再び奉天に出て夫より一路南下して滿洲の表玄關大連に至り、大連港の殷盛振を滿喫したる後、聖地旅順に詣づるは一般視察者の撰ぶ道順である。以下同ルートの船車連絡の狀態や主要地に於ける事情に就て概說を試み一般視察者の參考に資することゝする。

◆札幌から一路新潟へ

第一日目　札幌發　午前一〇、〇五　函館行急行
函館着　午後　四、四五
同　發　同　五、二〇　青函連絡
青森着　同　九、五〇
同　發　同　一〇、三五　大阪行急行
第二日目　新津着　午前　七、二九
同　發　同　八、一八　新潟行
新潟着　同　八、四七

◆日本海航路に依つて

新潟驛と新潟港の間は乘合自動車で約十五分、乘船は午後二時からで其の間充分時間に餘裕があるので、市内で所用や船中で必要な買物其の他食事等を濟ますことが出來る。

港（埠頭）には待合所があり荷物運搬の赤帽もゐる。

船は埠頭の岩壁に横付せられ婦人子供と雖も容易に乘込める。

ボーイから「リスト」と携帶品申告用紙が渡され間も水上警察の係員が渡航の目的や行先などについて簡單なことを訊ねる。

新潟午後四時出港（毎偶數日）

出港後朝鮮稅關吏の身廻品の檢査が始められ、少量のものは土產品として認められますが、新品の調度品反物等は課稅せられ、煙草酒等も旅中の飲用以外は携帶を許されず沒收されますから持込まない樣にしなければならない。

港を出てから約二時間後左舷側夕靄に薄れた佐渡の島が望まれる。

第三日目　一渉果しなき日本海の眞唯中、海上波穩やかに油を流した樣な中を時折「イルカ群」の水游の姿が眺められ廣大無涯の大自然の中に船は一路大陸へと力强い前進を續ける。

第四日目　早朝から大陸近づけりと船内空氣は活氣を呈する中にやがて高らかな警笛の響と共に船は早や大自然の良港羅津の突堤に巨體を横付けする。

手荷物は船のボーイに託し甲板上で簡單な檢疫をすまして上陸すれば大陸行の列車が乘込を待つてゐる。荷物は赤帽によつて直ちに列車まで届けられ内地の旅行同樣何の不自由もない。

殊に四呎八吋半の標準軌道は客車内もユツタリとして、何となく大陸的な氣分が旺溢し「蝶ネクタイ」をきりゝと結んだ、粹な旅客專務の姿にも特異な新鮮味が感ぜられる。

羅津からの主な列車

國都新京へ直通の急行列車の外、東滿の樞要地佳木斯や、京城との間には列車が往來してゐる。

◆上陸第一歩　羅津（人口四萬人、内地人六千人）

滿洲事變を契機として東北滿洲をヒンターランドとする羅津は一躍國際上の重要港に登場したのである。新潟港との間には國策日本海汽船會社經營の下に五千噸級の快速船が隔日に運航し、日滿を繫ぐ最捷の地點であり又國策遂行の重要據點となり、人口三十萬の都市計畫に依る發展の途上は大陸第一歩の驚異的印象である。

港口には自然の防波堤を築く大草、小草の兩島を浮べ東西四浬、南北六浬の天然良港にして、曾つては日露戰爭に又大正七年シベリヤ出兵の當時、我が艦隊四十七隻がこゝに數ヶ月間碇泊した事實がある。

△**北海道人會**　羅津府濱町一丁目林五三郎

△**旅館**　滿鐵直營**ヤマトホテル**

室料　四圓—十八圓　食事料（和洋定食）朝一圓五十錢、晝二圓五十錢、夕三圓

高砂旅館、草島旅館　四圓—十圓

△**土產物**

雲丹・雲丹漬・帆立せんべい・帆立粕漬・明太子・ツルチユツク・シロツプ

△**市内バス**（滿鐵直營）　一區　五錢

△**羅津、清津間乘合自動車**　一日五往復　運賃三圓五十二錢

△**手廻品の運搬**　上陸の場合は船内で、乘船の場合は車内でボーイに渡せば船内又は車内まで夫々赤帽が運搬してくれる（料金一箇十錢）

△**ビユーロー**が埠頭待合室にあるので出札口が混雜の場合は此處で買はれ又色々な案内書もあり至極便利である。

△**兩替**　新潟航路の出帆日に限つて船客待合所で日鮮滿各通貨の兩替を無料で取扱ふ。

△**驛待合室**　埠頭待合室には旅行案内所があり旅行に對する質問や其他團體に對して無料サービスをしてゐる。

◆圖佳線に沿ふて

愈々羅津を後に東亜の希望を乘せて颯爽と出發した列車は、悠々鮮滿の國境を劃して日本海に注ぐ圖們江の流れに沿ふて北進することしばし、やがて右の車窓には、世人の記憶今尙新たなる昭和十三年七月、吾が皇軍部隊が鐵血を以て確保した正勇山（張鼓峰）の山容が泛んで見える。

洪儀驛を過ぎて更に四會驛を出た線路は波狀地帶を曲折して次第に眼界は擴け、筏流に風趣を添へる圖們江の鐵橋を横斷すれば國境の街圖們の姿が眼前に展がつてくる。

◆鮮滿の國境圖們

△**通關**

滿洲の關門で旅行者は何れも稅關の檢査に立會はればならないが手廻品は列車の停車時間中車内で日滿兩稅關の檢査が同時に行なはれ、乘務員から豫め注意があるから、勢、其の他手廻品は何時でも檢査が受けられる樣にしておくことである。

檢査は至つて簡單先づ乘車券を提示、旅行の目的などに付て質問があつた後、次いで手廻品の内容を一寸調べるだけだ、檢査がすめば「チヨーク」で荷物にサインして呉れる、其の間約二〇秒、他に託送手荷物のあるものは車内の手廻品檢査がすんでから驛構

内檢査所へ行つて立會はねばならぬ、之も前記同樣至つて簡單である。

△時　刻

滿洲の時刻は二十四時間制だから、十三時とか十八時とか言はれてもピツタリこないが、之等の時間から十二時を差引いたものが午後で十三時とは午後一時であることが判るだらう。

△通　貨

邦貨（朝鮮銀行券を含む）は滿洲國幣と同價で流通してゐるから入國の際は滿洲國幣との交換の必要はない。其の他寫眞機、双眼鏡等で和製のものを除いては稅關に申告して稅關の證明を受けなければならぬ。

◆東滿新興の都牡丹江と佳木斯

牡丹江の數驛手前に東京城があり、此の地は渤海國の舊都があつたところで、其の名を龍泉府と稱し當時吾國との交渉も繁く、浦島太郎が訪れた龍宮は即ちこの龍泉府だと謂はれてゐる。

今や近代文化の餘影を受けて鏡泊湖の水流を利用し大發電が行はれ、青少年義勇軍の活躍の狀態が手に取る樣に車窓から望まれる此處より約二時間牡丹江へ着く。

大陸第一夜の夢は新興都市牡丹江で結ぶことゝする。

◆牡　丹　江（人口二十萬、內地人一萬五千人）

牡丹江は開拓鐵道としての圖佳線の建設を始め濱綏線に連なる交通の要衝に當り、產業開發の停め度なき人口の增加と背後地に於ける國策移民の增大とによつて、その經濟機構は擴大强化せられ西の哈爾濱と對比し東滿に於ける樞要地となつた。

尙この地は北海道、樺太よりの進出者が多く、本道とは總ゆる點に於て關係深きものがある。

主なる列車

新京行と京城行が午前に、哈爾濱行が午後に何れも直行の列車が出る。

其の外綏芬河行、虎頭行の列車があり、其の外佳木斯、羅津間の列車が往復發着してゐる。

△旅館　東北滿地方の都市では旅館組合聯盟に加入してゐないが大體他地方料金の一割高と見てよい、日用品は內地より五割位高値である。

滿鐵直營牡丹江ヤマトホテル

室料　四圓—一〇圓　食事　和洋共　一、五〇　二、〇〇

富士屋ホテル、芙蓉ホテル　五圓—八、五圓

◆佳　木　斯（人口十三萬人　內地人九千人）

こゝも牡丹江と同樣極く最近の新興都市である。

牡丹江からこゝ迄の間に開拓士や青少年義勇軍が相當入つてゐる、移民で有名な千振や彌榮等も近くで、此の方面は全く內地の汽車の旅と同じ樣な眺めだ。窓外には姉さんかぶりの婦人やれじり鉢卷の同胞農民も見受けられ力强く感じる。

△旅館は牡丹江より設備の點は少し落る樣だ。

◆二千噸級の大河川で松花江を上る

佳木斯から哈爾濱に出るには汽車だと牡丹江迄戻らねばならない。折角の旅行であるから同じ處を乘りたくなかつたので、二晩も費し佳木斯から松花江の汽船によることにしだ。

船は哈爾濱丸で琵琶湖の遊覽船の約三倍位の大きさで一名松花江の女王と云はれるさうである。等級は一、二、三等と別れて居り、運賃は哈爾濱迄三等で四圓十錢、二等で二倍、一等は三倍である。三等は板張りで殆んど苦力（滿人勞働者）が滿員で一寸乘る氣にはならない。

食事は別で相當な御馳走である。

一等　一日　三圓五十錢　和食　朝晝夕　七十錢　一圓四十錢　同

二等　同　二圓五十錢　朝晝夕　五十錢　一圓　同

綏臺の設備もあり料金は一等で三圓五十錢、二等は三圓で中々清潔である。四方の眺めもよくそれに船は滑べる樣な靜かさで滿洲にもこんなゆつたりした所があるのかなーと思はれ、あはたゞしい汽車の旅に較べると、本當に落付いた氣分になれ休養には最もよい。娛樂には碁盤、將棋、麻雀、新聞、雜誌、ラジオ、蓄音機等備付けてある。又給仕には四十位の日本人の品のよい女の人が居り、一寸した洗濯物迄心配してくれ親切で、內地あたりではこうゆつたりした旅は味はへないのではなからうか。

途中蓮江口、湯原、三姓、方正、通河、木蘭（ムーラン）等人口二三萬の都邑に寄港するので退屈することもない。

◆哈　爾　濱（人口六十六萬人、內地人四萬人）

人口七十六萬人を擁し、北滿洲第一の都會で、露國帝政時代には「東洋のモスコー」として構成されたところで、多端な露國の革命をよそに「ロマノフ王朝時代」の華やかな影を留め滿洲旅行には特異な存在となつてをる。

他の都市に見られぬ露西亞寺院、露人娘達のキャバレー、妓館、等

初めて訪ふものをして異國的な雰圍氣を與へ、又異常な興奮を覺えしむるものがある。其の一、二を擧げれば

「キヤバレー」 正面にステージを設け獨唱、バレー、コメデー等種々のアトラクションがある。食卓の四圍には滿、露人のダンサーが居並び社交ダンスが出來る。洋酒も料理もあり夜の九時頃から賑つてゐる。

「露人の妓館」 トロイカ(日人經營) ローサ(日人經營) 其の他二、三あるが總じて人數は少數である。

◆哈爾濱觀光箇所

「伊藤博文公銅像」 明治四十二年十月二十六日・明治の元勳伊藤公が、日韓合併の礎石となつて、哈爾濱驛頭に遭難せられた歴史的事件は、滿洲國成立の今日、更に悲痛な回想を呼ぶ。大正十四年日露協會と居留民會との發起によつて淨財二萬圓が募集され、公の青銅の胸像が製作された。この胸像は元居留民會樓上に在つたが、近く哈爾濱驛構内に安置せられることゝなつてゐる。

「志士の碑」 忠靈塔及び沖・横川兩氏を初め、脇・中山・田村・松崎六烈士の偉靈を祀る志士の碑がある。日露戰爭當時、露軍の輸送路を斷たんが爲め、嫩江橋爆破の重命を帶びた六烈士は、喇嘛僧に身を侑し、内蒙古を經て富拉爾基附近まで潛入したが、事露見して成らず、沖・横川兩氏は捕へられて哈爾濱に護送され、軍事探偵として此處に銃殺された。他の四氏は遁れて西に走り、更に鐵道破壞と敵狀視察との使命を果さんとしたが、途中、土匪に襲擊されて憤死せられたものである。毎年春秋の二季には盛大な招魂祭が擧行される。又附近に同じく日露戰爭當時軍事探偵として此の地で銃殺されたる小林向後二烈士の碑がある。

「博物館」 新市街の中央寺院に向ひ合つて在り、大陸科學院の所管で、商工部・人類學部・生物學部・醫學部等の部門に分れ、東清鐵道建設當時から蒐集された貴重な滿蒙關係の參考資料が網羅されてゐる。

「極樂寺と文廟」 極樂寺は南崗區と傳家甸との中間に在り、哈爾濱に於ける唯一の支那寺院で、一九二二年、時の東省特別區長官が哈爾濱に支那寺院の無いことを嘆き建立したものである。寺院の華美・壯嚴の點では滿洲の支那寺院中屈指と云われる。

文廟は極樂寺の南方敷町に在り、外觀の美も極樂寺に劣らない

この二つは哈爾濱に於ける景物中の異色である。

「外人墓地」 哈爾濱に遊ぶ人の目的によつて遊覽の場所も異るであらうが、この墓地を見學してゆくことも決して無駄ではない。新市街大直街の北端・廣大な地域に亘つてスラヴ人墓地・猶太人墓地・タタール人墓地がある。夫々宗旨を表はす十字架(基督教)

とシナゴーガ(猶太教)と弦月(マホメット教)とは、深い印象を刻むであらうが、柰夏綠葉の候には好適の散策地ともなる。

◆露西亞寺院

哈爾濱の市街美に大きな役割を果してゐるもの丶一つは露西亞寺院の大伽藍である。

二十餘の寺院が帝政露西亞の名殘りを留め、隨所に見える其の尖塔は陽に映えて五彩のガラス窓の奥に燈明の擧げられる頃は昔ながらの鐘の音が祈る人にも旅人にも一入寂しい餘韻を傳へるのである。

◆ハルビンの味覺

哈爾濱の味覺とは先づ異色ある露西亞料理が其の總てゞあらう。頗る種類が多く亦露西亞の各地方色があるが、此處では一般的なものを拾つて見やう。

ザクスカ(前菜)

牛肉、川魚類、野菜を一皿毎に巧に盛つたもので特に冷したものが一般に賞味せられる。川魚類には松花江・黑龍江産の高級なカヴキア(川鮫の卵)から種々燻製魚、鹽漬魚等珍味のものが多い。

ボルシチ(ポターヂユ)

露西亞スープの代表的なもので、牛肉の柔かく煮たものと白菜馬鈴薯等それに辛味を加へた濃い汁である、普通このスープ一つで滿腹して了ふ。

シヤシリツク(羊肉の照燒)

コーカサス料理の代表なもので、羊の肉を鐵串に刺して燒いた野趣のあるもの、之に特殊なソースとレモン・ヂユースを加へて食する。尙此のシヤシリツクには特殊な堅いパンの燒たてが添へられるものである。

其の他肉類の種々料理があるが油ッ濃く量が非常に多い。

アペード(ランチ)と云ふと前菜にボルシチ、魚か肉料理に珈琲か紅茶がついて一圓五十錢から二圓の程度である。

此處に面白い制度は斯樣に比較的安價な料理が一流料理店では夜になると、同一の店同一の料理で倍額位取られる場合がある之は露西亞人は朝夕食を簡單に濟ましし、晝食は一番金と時間をかけるから夜食をレストランですることが贅澤な風習とされてゐる爲である。

亦飲物には獨特なウオツカ(火酒)がある、頗る强烈であるが後の醉心地の良いものでレモン汁を加へたものは風味があつてよい。

主要なレストラン

滿鐵厚生會館、ヨツトクラブ、小ヨツトクラブ、モデルン、ロゴ

シンスキー

◆松花江（スンガリー）

哈爾濱のほんたうによい季節は五、六、七の三箇月である。五月になると白い花をつけた「チェリーオームハ」が南崗の社宅街あたりに散見する。與謝野晶子女史は五月を歌つて曰く

哈爾濱は帝政の世の夢のごと白き花のみ咲く五月かな

六月に入ると巷の辻では「鈴蘭（ランデシヤ）」や野の花が賣られ出し、山の手森の街一面は「柳絮（リウヒエ）」が雪の如く飛びかひ、目も口もあけられない。かゝる宵、南崗の社宅街ならば、もの寂しい風情があらうし、又山の手の秋林（チユウリン）前のベンチなら、色とり〴〵の國際的男女が憩ひ、行き交ふ人々の姿を眺めてゐるであらう。若しそれがプリスタンの銀座なるキタイスカヤ街なら、ロシヤの女達の夏姿が凡ゆるものを壓倒して往來するであらう。

春から夏へ、ぐん〴〵變つて行く北滿のすがたの遽しさ、あれよ〳〵と云ふ間に、もう直ぐ夏だ。夏の天國は松花江（スンガリー）である。太陽島、十字島附近には裸體の男女が、扁舟にしぶきをあげながら戯れてゐる。更に松花江からゾウトフの支流を遡つて極樂村あたりに辿りつくならば、郭公の聲がきこえる。「哈爾濱もこゝまで來れば閑古鳥」である。別莊（ダーチヤ）のあるあたりから、ゾウトフ河の遙か上流なる野の涯に沈む夕陽はこよなく大きい。「北滿の大地の母なるスンガリー」である。聽て八月の半になると風の音、空の色、水の面は秋を語る。

主なる列車

滿鐵のホコル陸の王者**アジア**號が午前十時大連に向けて發車する外、牡丹江へは午前と午後に、其の外滿洲里方面へは午前二時に、チヽハル方面には午後に二本列車がある。所用時間大連へは特急で約十二時間半急行では約十八時間牡丹江へは十二時間、チヽハルへは七時間、滿洲里へは二十三時間で達する。

△視察は觀光バスが一番よい。一日午前午後の二回で所要時間四時間である。コースは

哈爾濱驛—哈爾濱神社—ミルレル兵營—忠靈塔—志士の墓

博物館—孔子廟—ロシヤ人墓地—ロバート高臺—傳家甸—埠頭

松花江—太陽島—觀光亭—キタイスカヤ街—哈爾濱驛

料金は大人二圓五十錢、小人一圓五十錢

△**旅館**

滿鐵直營**ハルピンヤマトホテル**

國際ホテル（一泊朝食付）四圓—七、五圓　鶴屋旅館（三、七圓—六、五圓）滿洲ホテル　五圓—八圓

△**土産物**

寶石類　ウラル產ダイヤ・ルビー・アレキサンドリヤ等

食料品　罐詰・ハム・筋子・バター・チーズ・燻製品・蜂蜜等

織物類　ロシヤ更紗・麻織物・卓子掛・毛布・ルバシカ等

毛皮類　羊の腹子・獺・狐・狢・カンガルー等

骨董類　舊露國金銀貨・舊露國勳章・食器類等

其　他　酒類・煙草類・露西亞菓子類・繪葉書等

◆國都新京（人口五十五萬四千人、內地人九萬七千人）

滿洲國の躍進の姿を見たいならば、又張り切つた其の底力を把みたいならば、何よりも先づ國都新京建設の雄大な構想に目を放たねばならぬ。

第一期事業の完成によつて國都としての輪奐の美を備ふると共に政治經濟文化を始め凡百の分野に於て滿洲國の指導的地位に立ち、滿洲國の動向を明示するに至つた、宏莊雄大にして近代建築の粹を集めたる國務院を始め、各官衙の倚羅星の如く建並びたる樣は、眞に天下の偉觀である。

建國玆に九星霜、その輝かしき躍進譜こそは即ち滿洲帝國の健全なる發達を物語るもので、之等主要機關に日本側では關東軍司令部大使館、關東局、駐滿海軍司令部、滿鐵新京支社があり、滿洲側では宮內府を始め國務院、同總務廳、各部尙書府、參議府、立法院、監察院等の中央機關は全部網羅され、日滿一體不可分の關係は如實に具現せられてゐる。

◆新京近郊の戰蹟

「寬城子」　寬城子事件で有名なこゝ寬城子は、滿洲事變でも吾が忠勇なる將士を惱まし幾多尊き犧牲者を出したのであつたが、忘れもせぬ昭和六年九月十九日、今は幽明その境を異にした故勇士の墓標と共に記念碑が建てられ、一步舊兵舍に入れば數多くの銃痕は當時の激戰を彷彿たらしめるものがある。

「南嶺」　敵兵四千四百名野砲三六門をものともせず、勇敢にも寡兵敵陣めがけて突進した我軍は、小河原大隊長先づ負傷し次で倉本中隊長戰死、同中隊は全ど全滅に瀕したが奮戰の結果遂に敵を潰走せしめたこゝ南嶺の戰跡には、一塊の土一叢の草皆尊い血潮の洗禮を受けてゐるのだ。

「新開河附近」　新京から列車で南へ下ること約二十分新開河の鐵橋がある。河畔の樹蔭には挺身隊の物語りを秘めて田村中尉以下勇士の靈が靜かに三十年來の夢を結んでゐる。心ある旅人は窓外に展開する戰跡に心からの感謝を捧げずにはおられない。

主なる列車

羅津行急行が午前八時と午後に（所要時間十三時間半）
清津行は午後に發車する　（同　二十時間）
牡丹江へ夜中發車牡丹江へは翌日午後八時頃到着。
他に釜山行直通の列車が急行「ひかり」と「のぞみ」が午前と午後に發車、所要時間約二十八時間で釜山に到着し內地への旅行にはなくてはならぬ列車である。
其の他大連行、奉天行、四平街行等の列車が約一時間おきに運行し、流石滿洲國の首都たるの威容をしのばせるものがある。

△視察は觀光バスにて午前、午後の二回　所要時間は三時間
料金は　大人　二圓　小人　一圓五十錢
コースは
驛—新京神社—忠靈塔—寬城子戰跡—日本橋通—舊國務院

△旅　館
滿鐵直營新京ヤマトホテル
室　料（歐式）三—二十五圓（米式）八圓—三十圓
食事料（洋食）朝一圓五十錢　晝二圓　夕二圓五十錢
（和食）朝一圓　晝一圓五十錢　夕二圓
其の他の旅館　大都ホテル、大和新館、新京ホテル

◆吉　林（人口十七萬五千人　內地人一萬五千人）

列車で新京から東へ三時間で古都吉林に着く、松花江に臨む人口十七萬の古い都で「滿洲の京都」と謂はれ熱河の承德と共に滿洲に於ける二大觀光地で山川のたゝずまい、山紫水明、柳暗花明、滿洲情緒を滿喫するには是非立寄らねばならぬ都で、殊に秋の松花江の鵜飼は有名なものだ。

又此地は今から約一千二百年前渤海國の旺んなりし時吾國との交通が頻繁に行なはれたことが史實に殘つており、吾國として國交史上由緒の深い土地である。

「豐滿ダム」　第二松花江を遡ること二十四粁永吉縣大豐滿の峽谷を堰堤を以て河流を締切る東洋第一の發電工事が起され、この工事は琵琶湖の約七割、アメリカの「ボールダー」に次いで世界第二の人造湖となるわけで如何に滿洲國事業のスケールの大きいかに一驚を喫すべく、隨つて單なる觀光地としてのみでなく大工業都市としても一大躍進を約束せらるゝに至つた。

△觀光バス運行
運行期間　自六月一日　至十一月末日
經　路　驛—神社—孔子廟—元領事館—豐滿ダム—北山—河南街—驛

料　金　大人三圓五十錢　小人二圓
運行時間、自十一時　至十六時（一日一回）

△旅　館
東京旅館　四、五圓—六、五圓　大丸ホテル　四、五圓—六、五圓　其の他松屋旅館、初音旅館等
保健館　吉林驛より六粁餘の自來水遊園內に在り、吉林市營ホテルで食堂が附屬してゐる。
室　料　二圓、三圓及六圓である。

△土　產　品
哈　油　山中に棲息する特殊の蛙から精製した精力劑、一箱四圓以上
藥用人參　吉林特產物の隨一として古來名高い靈藥。一兩（十匁）二圓以上
藥　酒　强精榮養酒にして老骨酒、白玉露、玫瑰露、梅桂露等の種類があり、一瓶一圓以上
百果仙膠　果物の核實を老骨膠及蜂蜜で固めて拵へた榮養菓子
老山浸糖　藥用人參を混入して拵へた砂糖菓子
蜂　蜜　一瓶一圓
ステツキ　俗に北山ステツキの名で呼ばれ、北山の登口で賣つてゐる。一本五十錢
搬不倒　日本の起上小法子に似た女性の人形で、滿洲の鄉土色豐な珍重すべき玩具である。三十錢より一圓五十錢迄
老虎枕頭　布製の虎の形をした枕で、滿人は子供が健かに育つことを念願して、之を子供の枕に愛用してゐる。三十錢より一圓五十錢迄
北山玩具　北山廟會の參道を飾る、多くは泥製の玩具で、鳥、鹿、豚、兎、鷄、魚等の種類があり、一箇二、三錢より二、三十錢程度であるが、廟會の際以外は需め難い
土產品は上記の殆んど全部を吉林驛の賣店で賣つてゐる。

吉　林　ぶし

サー滿洲吉林　柳の都
風に柳の品のよさ
ハ、遠くで近いは滿洲の吉林
サー松花江さへ　吉林までは
水の流れも澄んで來る
ハ、遠くで近いは滿洲の吉林
サー滿洲見物　吉林見なきや
滿洲見たとは言はれない
ハ、遠くで近いは滿洲の吉林

◉奉　天（人口百十五萬人　内地人十二萬人）

奉天は以前張軍閥の根據地で滿洲事變の發端地であり、又日露戰爭の雌雄を決したる奉天大會戰の行なはれたるところであつて、國民として忘ることの出來ない由緒を持つ。

張作霖は多年の宿望を果す爲、北京に入つて大元帥を僭稱したが槿花一朝の夢破れ國民革命軍の北伐に會ひ、昭和三年六月歸奉の途次奉天郊外に爆死を遂げ、子學良は其の後を繼ぎ滿洲の支配者として國民黨及南京政府に近づき、國民黨の排日政策と歩調を合せ、日本を大陸より驅逐せんとし、三十年間孜々として築き上げた日本の權益は蹂躙せられんとし各種の迫害は日を次いで其の數を增し一觸即發の無氣味な空氣は兩國間に低迷し、遂に昭和六年九月十八日夜半突如滿鐵線柳條溝の爆破に依つて滿洲事變の導火線となつたものであるが、其の地點も程近く記念碑がみゑる。

今や交通の要衝に當り鐵道は四通八達、炭都撫順を近くに控へ滿洲の心臟部に當り、工業都市として鐵西には大小の工場林立し、其の發達はあまりにも有名なものである。

△在奉北海道人會

奉天市大和區淺間町二

工　藤　喬　三

日滿支交通の中心地點奉天驛

奉天は滿洲國諸產業樞要地なるのみならず、交通上の要衝に當り、連京線を始め北支方面へは奉山線によつて熱河方面へは新義線、朝鮮方面へは安奉線、古都吉林へは奉吉線に依つて連り、日滿支の鐵道網は奉天に向つて集中せられてをるのだ。

「南大門」　大山大將が入城せられた南大門は吉順糸房（百貨店）屋上から望見せられる

「柳條溝爆破記念碑」　滿洲事變發端の柳條溝爆破の跡には記念碑が建てられ車窓近くに當時張學良以下の暴狀が目に浮ぶ。

「北大營の戰蹟記念碑」　車窓より望むことが出來る。

昭和六年九月十八日午後十時三十分、突如柳條溝の爆破により滿洲事變の火蓋は切られた、當時張學良は父張作霖の後を繼いで實權を握り、民衆には暴政苛稅を行ひ、我國に對しては排日侮日の煽動を續けた。

此處は當夜王以哲以下一萬人の兵と我が獨立守備第二大隊長島本中佐の率ゆる六百名との最初の激戰地である、我軍の疾風的夜襲功を奏し敵兵舍の屋根は飛散し、壁は打拔かれた當時の戰跡そゞろ激戰を想はす。

「鐵西工業地區」　新興滿洲をシンボライズする奉天商工業の發展躍進ぶり、分けても此處鐵西工業地區は內地大資本家の投資により大工場の激增、天を突く大煙突の林立、是こそ近代的偉觀である。

「北　陵」　今を去る約三百年前の建造にかゝる清朝第二代太宗文皇帝の陵、老松の綠濃き森に朱塗の樓閣、磚道、兩側に竝ぶ石獸、傳說秘めらるゝ聖德神功碑、石門、石階、壁間に刻まれた鮮やかな彫彩等配合の妙を得たる美觀は當時の盛期が彷彿される。

△視察はやはり觀光バスにて一日一回午前十時驛より

所要時間　六時間

コースは

驛前—忠靈塔—國立博物館—北陵—柳條溝—北大營—天齊廟—鐵西—南部住宅街—驛（全コース）

一日午前午後の二回　所要時間三時間半

驛前—忠靈塔—北陵—柳條湖—北大營—城內—同善堂—奉天神社—奉天驛（短コース）

何れも明朗なガイドガールが案內する。

料金は　全コース　大人二圓五十錢　小人一圓五十錢

短コース　同　一圓五十錢　同　九十錢

園體の觀光バス手配は人數に應じて最も經濟的に貸切、混乘と世話してくれるから心配はいらない。

◉奉天の同善堂

奉天で注目に値するものゝ一つに小西關、高臺廟西の同善堂がある。一廓の東側に通ずる埃ッぽい道路に面して「救世門」と記した門があり、中央の丸い穴の兩側に

明產或私產之嬰兒　其父母不願撫育者

請速送入此門本堂　收容後保障其生命安全

とある。つまり、私生兒でも何でも我子を育てたくない人は早くこの穴に入れて下さい、その生命は保障する……といふ凡そ亂暴な文句が白日の下に連れてあるわけである。この穴に嬰兒を挿入れるとリーンとベルが鳴つて救生室の乳母が素早くこれを內側から引出す仕掛になつてゐる。かうして投込まれる捨兒が月に平均六、七人それも大低眞ッ晝間といふから驚く。

拾はれた赤ん坊はその時からタイル張りの明るい部屋のさッぱりしたベットに寢かされ、專屬の乳母によつて育てられるのだ。以前は赤ん坊一人に一人の乳母が附いたものだが最近研究の結果、不健康な母乳より山羊乳が優つてゐることが判り、吾が長野縣から七、八十頭の山羊を買入れ漸次山羊乳に代えてゐる。入浴は毎日二回くらゐ、日に一回體重と體溫を計つて統計表をつくり、體質と發育狀

況に應じて山羊乳、母乳、人工乳を適宜按配される。專門醫の指導の下に日滿人の看護婦が世話に當つてゐて、病氣すれば附屬病院に入れられて手厚い看護を受けるなど、至れりつくせりである。

南受けの明るい部屋、白いシーツの上に幼兒たちは眠つてゐる。小さな頭の眞中にチョンと殘した長い髮、可愛いゝ口許、小さな枕……乳母の子守唄につれて彼等の夢は何處を遊んでゐるのか、生み捨てた薄情な親たちの許へであらうか。

此處に收容されてゐる滿二歳以下の嬰兒は八十名である。

やがて離乳となりヨチ〳〵歩きができるやうになると、方々から子供の貰ひがかゝる。市内に確かな保證人が三人あれば身許調査のうへ手離すことになつてゐて、毎年此處から百人近くの子供が養兒として貰はれてゆくといふ。

堂に殘つた子供も、成長するにつれて附屬の幼稚園に入り、さらに小學校で四ケ年の普通教育を受ける。その後は各人の適性に應じて夫々堂内に附設された木工、印刷工、毛氈工、裁縫工の各工廠に徒弟として入所し、此處で一人前の熟練工に仕上げられる。そして徒弟期間の賃金は堂で積立てゝあるので、一人前になつて出所する際には小商賣は開ける程度の貯金もできる仕組である。赤ん坊で捨てられても同善堂はちゃんと獨立の社會人に仕上げてくれるのだ。

また、舅や小舅にいびり拔かれた若嫁、甘言に釣られて寶飛ばされた姑娘、樓主の折檻に泣く藝酌婦、さては夫婦喧嘩の擧句飛出してきた細君など「弱き者、虐げられし妻、女」を收容する濟良所があり、老ひて寄るべなき老人、人生の不幸を運命づけられた不具者こんな人達も救濟所に收容されて靜かに餘生を送つてゐる。

一時の火遊びから世間を憚る體になつて、こつそり身二つになりたい未亡人や若い娘さん、又は家貧しくて出産費用のない人たちを無條件で世話する救産所、或は喰ふに食なく眠るに家なき貧民やルンペンにパンと睡眠を與へる失業者收容所、さては濟良所の歪められた女達を世間並の女に仕上げるための裁縫所や産婆教育所など……同善堂は凡ゆる薄幸な人達を溫く抱擁し、その更生、安息の殿堂となつてゐる。

現在一日の收容總人員は約七百五十人、これを一ケ年に延べれば二十六萬人を數へ、その經費は三十三萬圓に達する。この財源は、創設者たる左寶貴將軍の遺産と張作霖や郭松齡の遺骸を納むる珠林寺の納棺料、それに零細ながら五十錢、一圓と毎日の參觀者から寄せられる義金などで賄はれ、獨立の財團法人組織によつて經營されてゐるのである。創立は今から約六十年前の光緒七年、歴史の古いことゝ規模の大きく且つ整備した點では、フランスにあるこの種のものを除いては世界にも類例ない社會慈善施設だといはれてゐる。

さて、こゝに注目すべきことは、一般から冒すべからざる宗教的

殿堂と見られてゐるせいか、同善堂には肚黑い者や後暗い者は決して近寄り得ないことである。本當に思ひ餘つた者のみが清い心で助けを求めてくるのである。創立以來嘗て堂内で不都合な事件の起つたことがない點に觀ても、このことは窺へやう。一萬三千坪といふ堂内の何處を歩いても、およそ捨兒、廢疾、貧困といふ暗い翳など微塵もなく、廣い中庭は涼しい樹蔭に蔽はれ舗道の兩側には色とりどりの草花が咲き亂れてゐて、溫かく清々しい落着きを見せてゐる

滿洲國はあらゆる部門に目覺しく發展してゐるが、その反面には社會の落伍者も殖えてゆく、同善堂の眞價は今後さらに高まるだらう。

△旅　館　ヤマトホテル（大廣場）滿鐵の直營になる洋式旅館で近代アメリカン・ルネツサンス式四階建の瀟洒たる大建築諸般は善美を盡してゐる。

（歐式）六圓―二十五圓（米式）十一圓―三十圓　食事料（洋食）朝一圓五十錢　晝二圓五十錢　夕三圓（和食）洋食に同じ

其の他主なる旅館…瀋陽館・大星ホテル・滿洲ホテル・一力旅館・九州館（浪速通）・昭和ホテル・中央旅館（千代田通）・東亞旅館・平安ホテル（平安通）

△土産品　毛皮、支那反物、麻雀、トランプ、撫順琥珀細工、同石炭細工

◆炭都　撫　順（人口二十二萬人　内地人三萬人）

炭都撫順は日露戰爭前露國極東森林會社の經營であつたが、陸軍記念日たる明治三十八年三月十日我が軍に依つて占領せられ、其の後野戰鐵道提理部に於て採炭してゐたが、明治四十年四月南滿洲鐵道株式會社が創立せらるゝや其の經營に移され今日に及んだ。

世界に誇る露天掘の炭坑、高度國防國家の一翼たる油母頁岩からの製油石炭液化、輕重金屬特殊鋼等の各種工業は非常時局下に於ける東亞共榮圏確立の推進力として、愈々其の使命を倍加するに至つた。

△視察は觀光バスとして一日二回でコースは

驛―炭礦事務所―大山坑―古城子露天掘―撫順神社―殉職碑―驛

料金は　大人一圓二十錢　小人七十錢

◆承　德（人口四萬五千人　内地人四千人）

世界の秘境と謂はれ熱河の中心に位し、清朝の構築になる喇嘛廟のあるところで、輪奐の美結構の壯全く驚異的な建築であり、滿洲の觀光に除いてはならぬ土地である。

承德市街は四邊山に圍まれ、東に武烈川が流れ、北隣に避暑山莊

があり、東西三粁南北二粁半、住民は承德創草時代、河北山東方面から來住したるものが多く、又此處から萬里の長城を隔てゝ北京には滿鐵の錦古線或は乘合自動車に依つて通じられ、人文的にも交渉が繁く滿洲中尤も支那氣分の旺溢せるところで、承德の人情風俗文化を究むれば北支視察の目的の大半が達せられると言つても決して過言ではあるまい。

△北海道人會　承德街火神廟後街　伊藤忠雄

承德を中心とする交通機關

鐵道・錦古線（五四二粁二）承德より平泉、凌源、朝陽、義縣を經て錦州に至り奉山線と連絡、又東亞屈指觀光地たる北京へは、こゝから古北口を經て、直通列車が運行してゐる。

「避暑山莊」清朝の始祖が滿洲から屈起して四百餘州に君臨することゝなつて何よりも苦心したのは四億の漢民族をいかに收攬してゆくかにあつた。そして此處に見出させたものは素朴尙武の性情を有する塞外蒙古人を懷柔し、その漢人に對する民族的恩情を利用し、俱に提携して漢民族に當ると共に、露國の東漸を阻まうとする方針をとつた。承德に離宮を造營するに至つたのも單にその景觀の美を愛でる爲ばかりでなくこの意味に於ける塞外行幸の便に供し、蒙古諸王侯の朝覲をも行ひ朝政を聽くためで、離宮はその陪都の如き存在であつた。

康熙帝の親蒙政策は、次の乾隆帝時代になつて一層の厚みを加へた。帝の六年（紀元二四〇一年）の行幸を第一回として後には之を歲巡の制にし、圍場御獵地への行幸も亦復活され、市況も更生し、山莊內は勿論、莊外の寺廟も事ある毎に造營を見、熱河はこゝに類なき壯觀を呈した。然し道光以後は皇帝巡駕の例も廢れ、清朝も漸次凋落し始め咸豐十年（紀元二五二〇年）文宗皇帝が英佛聯合軍の北京侵入により、此處に蒙塵されたのを最後として、熱河も次第に衰微するに至つた。

「避暑山莊（離宮）」熱河離宮は清の康熙四十二年に起工、六ケ年の年月を經て完成した一大庭園である。

山莊をめぐる繞垣は周圍三里、その基底の廣さは一丈、高さは二丈五尺であるといはれてゐる。離宮內の西は山丘重なり東の一部は平地である。その平地の中央が如意湖となり如意湖の南の丘に宮殿が建つてゐる。湖を中心として東岸に文園、金山等が建ち、北に永祐寺の舍利塔が繪の如く美しく庭內を引きしめ西の山麓下に文津閣、珠源寺が建つてゐる。

西方の峯巒は谷から谷、峯から峯に舗石道が走り、其處の谷蔭彼處の峯嶺に寺觀堂塔、殿閣亭榭など、樹間に隱見して、其の景觀の壯美は想像するに餘りあり、康熙、乾隆兩帝勅選の三十六景もさこそと思はるゝのであるが、今は概れ荒廢に歸し、僅かに廣元宮其他の數字が僅かに倒壞を免れて散見するのみである。

「喇嘛廟」避暑山莊を中心としてその外輪上に、天然と人工の調和を巧に按配して極めて美術的にしかも雄豪なる寺廟（俗に八大處又は八大寺と稱す）の建造が營まれてゐる。

然しながら、これら寺廟の豪華な結構も、自來凋落の一途を辿り、僧廟共に因德の極に達してゐたが、滿洲國建國以來政府は東亞有數の遺蹟たるに鑑み、これが維持保存に力を致すことゝなり、每年數十萬の費用を投じて既に修理に著手されてゐるので、近き將來には舊觀に接することが出來やう。

△遊覽バス運行開始

經路　ビューロー承德案內所前—忠靈塔—觀光道路—喇嘛廟—避暑山莊—ビューロー承德案內所

料金　一圓五十錢

運行時間　案內所前一〇時發　所要時間三時間

說明　運轉手

註　但し十名以下の場合は運轉せぬが十名分の料金を支拂へば運轉す。

△避暑山莊喇嘛廟參觀料

避暑山莊・個人大人二十錢、小兒十錢、團體二十名以上一人に付大人十錢、小兒五錢

喇嘛廟・個人大人五十錢、軍人學生二十錢、小學生以下十錢、團體二十名以上一人に付大人二十錢、軍人學生十錢、小兒五錢

△旅館

承德驛ホテル、承德ホテル、松屋旅館、梅屋旅館、日光ホテル春日ホテル、大和ホテル、大同旅館、築前屋旅館等がある。

宿泊料は三圓以上十四圓迄である。

△土產品

熱河風俗人形、佛像模型、鍮細工、絨毯

◆大連（人口五十八萬人　內地人十七萬人）

大連港は極東の自由港であり、興亞大陸を繫ぐ海の關門であり。又滿洲國の大玄關にあたる。明治三十二年露西亞は東方侵略の一大據點とすべく五箇年の間都市と港灣の建設に努力したのであつたが完成を俟たずして日露戰爭の結果、我が國の繼承するところとなり爾來三十有餘年長足の發展をみせ年間の輸出入量合計約一億噸、上陸客數四十五萬、乘船客三十二萬を呑吐し、今後益々增加の傾向を有し、力强き大陸へ伸張のバロメーターとして活況を呈してゐる。

市街はアカシヤの街と呼ばれる程街路樹はアカシヤが多く、初夏

白い花房のそよぎに風さへ薫り常に手入の行届いたタールマカダ道路の清爽さは、この街を訪れるものをして好感を與へずにはおかない。

「油房」市の東部と、寶町一帶の地と、西崗子とに多く存在してゐる。滿洲の生む大量農產物大豆から、豆粕とを製出する工場を油房と呼ぶ。油房業者は全滿洲に亙つて約大小三千餘の工場を營んでゐるが、そのうち一〇〇に近い數が大連に於ける第一の工業として位置してゐる。豆粕の最大消費先がわが國であり、尙滿洲に於ける農產工業としての代表的のものなることにより、滿洲視察者の足を停めて見學すべき處となつてゐるが、夏から秋にかけては休業することがある。日清・三泰・豐年・小寺・三菱等はその代表的のもので、新式のものは大掛りな機械力で水壓式によつてゐるが、油房內で油にまみれた裸形の苦力の豆粕を運ぶところなどは珍らしい作業振りである。

「滿洲資源館」露西亞町の一角兒玉町に所在し、滿鐵の經營である。滿蒙の鑛產・林產・農產・畜產及それらの加工品並に鐵道・港灣等に關する標本・模型・圖表等を陳列して一般の觀覽に供してゐるから、視察者にとつては、一目滿洲經濟資源の輪廓を把握するに最も都合よく見逃せない所である。

◆大連の地方色

大連に於ける地方色の最も特異なるものを擧げるならば、社會施設としては、市の東端東山町にある福昌華工株式會社の碧山莊華工收容所、八幡町の人力車夫收容所並びに嶺前屯及び白雲山麓に於ける馬車夫收容所等に指を屈することが出來る。碧山莊に收容してゐる苦力の數は季節的に移動があるが、十二月から翌年五月迄の繁忙期に於て約一萬五千人、六月から十月迄の閑散期に於ても約九千五百人で、山東省から渡來するものが其の九割を占めてゐる。いづれも前述したやうに、大連埠頭に於ける荷役作業をなすものである。會社は彼等の福利を基調とする勞働團體合成組織の編成を實現してゐるわけで、彼等の生活を保證し、その向上發展に資せんが爲の諸般の施設は、眞にこれら勞働者の安樂鄉となつてゐるので、社會・勞働問題の研究上、視察者にとつて亦見逃すことの出來ないものであらう。他の車夫收容所も共に株式組織であり、千四百臺の人力車と七百臺の馬車とは市內の交通に異彩を放つてゐるが、悉く滿洲國人の仕事である。

戎克（ジャンク）の碇泊に充てられてゐる入船埠頭、俗にいふ露西亞町波止場も亦滿洲特異の情趣を有し、戎克によつて運ばれた物資が、石壘の濱に陸揚げされ、檣頭の紅旗は群がりよつた船から一齊に翻り、時

に海上の船から物騷がしいうちにも諧調ある樂音が傳はるなど、特に夕方のこの波止場の氣分には情味の豊かなものがある。戎克による仲繼貿易は、汽船貿易と竝んで仲々に侮り難く、年額十五萬瓲、七百二十萬圓に達してゐる。仕向地の大半は滿洲各地で、山東・江蘇・直隸など之に次ぎ、仕向品には豆油及び滿洲特產物が多い。

市內は奧町のあたり、風呂・芝居・料理に「滿洲情調」を味ふのも興あることであるが、その特異にして且興味あるものに觸れんとせば、一に社會相の縮圖として纏つてゐる西崗子を訪れるに越したことはない。中にも小盜兒市場とさへ言はるゝ露天市場、其の他梨園（劇場）、書館（妓樓）は素より寄席・見世物小屋奇術師さては覗きからくり等、口腹の慾を充たすと共にこよなき慰安を得せしむるやうになつてゐるのである。因に全市街中、滿洲國人の大集團は西崗子の全街を始め寺兒溝、千代田町附近、奧町監部通りあたりにあたつて、鮮かに民族的色彩を强めて「滿洲情緒」をあやなしてゐる。

◆大連の小盜兒（ショートル）市場を見る

內地からの旅行者が必ず滿洲に見なければならぬものゝ一つに西崗子の露天市場俗に小盜兒市場がある、內でも尤も著名なものは西崗子橋立町の露天市場である。

小盜兒とはコソ泥のことで、北京の天橋のやうに盜まれたものは此處で搜せるといはれたくらいだ。

がらくたながら此處には何でもある。大は算筍から小は折れ釘まで、生活必需品の原始的大アパートの觀がある。しかし今日では新體制の波に押されて定價賣りを實施し、此處の商人が大連市內の質流れ品を處分する購買組合を組織して各々株を持ち、株のないものは質流れ品の購買を許可しないので、恰も大連に於ける全質屋からの流品市場に等しい。

ラヂオ、蓄音機、靴、洋服、大工道具、臺所道具一式など所狹きまでに列べてあり、市場四區を廻ればざつと見ても小一日はつぶれてしまふ。

昔は銀と思つて買つた指輪がプラチナだつたり、水晶か硝子と思つたものがダイヤだつたり、さう云つた掘出し物の話を隨分聞かされたものだつたが、今ではそんなボロイ話もなく、市場は堅實な歩みへ進み、購買者の安心と信用を博しつゝあるといふ。

此の種の市場は滿洲の都城、市街の場末ではよく見受けられる原始的な市場形態で、滿人社會の生活縮圖といつた奇觀を呈してゐる大連の露天市場が生れた動機には、日滿兩者に微笑みかける溫かい仁義物語がある。

淸朝の遺臣たる肅親王が一門百三十六人を引具して旅順に亡命したものゝ、この大家族では莫大な生計費捻出が容易でなく、肅親王

家の顧問用島浪速翁の創案で市場經營の策を樹て、今の高等法院の在る空地に、板圍ひにアンペラ張りといつたお粗末な堀立小屋の露天市場を設けたのが大正七年だつた。

その頃はボロ、古莚、木屑、古材木の類に過ぎなかつたが、それでも相當の賑ひを呈してゐた。しかしその經營から得る收入だけでは大家族の賄ひにならないので、新たに土地の貸下を申請すると同時に東拓から三十萬圓の低利資金の融資を受けて、大正十年十二月現在の場所に引移つたのであつた。

大連埠頭音頭

巴里へ行きやるか　曠野を越えて
船車連絡　ソリヤ
沖の鷗も　えゝ　いそ〳〵と
ハアー
新興滿洲　大連埠頭は
出船入船　東洋一　サツテモ　ハオハオ

擔ぎや八枚　豆粕ア塔だよ
海風ドント來りや　ソリヤ
あの子見惚れる　えゝ　振りのよさ
ハアー
新興滿洲　大連埠頭は
出船入船　東洋一　サツテモ　ハオハオ

△**大連觀光バス運轉開始**

運轉期間　自六月一日　至十一月末日
發着時刻　發午前八時半　發午後一時半
（一日二回）　着午後〇時半　着午後五時半
コース
常盤橋大連都市交通會社前—山ノ茶屋—忠靈塔—大連神社—大廣場—埠頭—碧山莊—油房—露天市場—星ヶ浦—常盤橋大連都市交通會社前
料　金　二圓（但し小兒半額）

大連を中心とする主なる航路

大阪商船

七八千噸級の大型優秀客船による日滿連絡船が、內地向け大連午前十一時出帆、大連向け神戸門司正午出帆

（船客運賃）

相互間	一等	二等	三等
大連—神戸	六五圓	四五圓	一九圓
大連—門司	五五圓	三七圓	一七圓

船車連絡バスの運轉

奉天、新京哈爾濱行旅客の爲め日滿連絡船は滿鐵特急あじあに接續されるが此等船車連絡客の爲め大連埠頭の本船と大連驛相互間に連絡バスの運轉がある。

其の外大連汽船

定期航路は大連—青島—上海（二日又は三日毎に出帆）と大連—天津線（隔日）安東—大連—天津線（十日一回）

大連、青島、上海線

相互間	一等	二等	三等
大連—青島	三六圓	二四圓	八圓
大連—上海	七五圓	五〇圓	一八圓
青島—上海	五五圓	三六圓	一二圓

大連、天津線

相互間	一等	三等
大連—天津	二七圓	八圓
安東—天津	三〇圓	一〇圓
安東—大連	一五圓	五圓

△**要塞地帶**　大連及その近郊は要塞地帶で撮影・模寫・測量・模造錄取・航空等は一切要塞司令官の許可を要することになつてゐるから、旅行者は特に注意すべきである。

△**旅館**

滿鐵直營大連**ヤマトホテル**（歐式）四圓—三十圓
食事料（和洋食）朝一圓五十錢、晝二圓五十錢、夕三圓
滿鐵直營星ヶ浦**ヤマトホテル**（歐式）五圓—十二圓
食事料（洋食）朝一圓五十錢、晝二圓五十錢、夕三圓
星ヶ浦**ヤマトホテル別館**　六月十五日より九月十五日を限り開館する（歐式）三圓—六圓
食事料（和食）朝六〇錢、晝夕各一圓
その他主なる旅館　遼東ホテル・日本橋ホテル（大山通）・中央ビルホテル・天滿屋ホテル（西區）・ナニワホテル

◆大連より旅順へ

△**鐵道**　旅順行の列車が海水浴場として無雙の定評ある夏家河子を過ぎ、高勾麗時代の古城址のある營城子を經、日露役旅順攻圍戰にわが後方陣地となつた龍頭を後にする頃から、最早や車窓の左右に現はるゝ山々は、總て戰蹟にあらざるはなく、此は二龍山、彼は望臺など諸堅壘の綿々と續くを見、更に綠に包まれたるクロバトキン堡壘を右方に水師營の家並をその西方に指呼しつゝ、大きく鈎なりに松樹山麓を曲れば、表忠塔聳え立つ白玉山下の旅順驛に着く。

△**旅順行バス**　大連より旅順戰跡觀光をするには先づ大連市常盤橋より發車する旅順行バスを利用するのが便利であります。旅大南道は海岸線を縫つて縱走し、タールマカダム道路上快適なドライブするサイトシイング、コースであり、又旅大北道路は男性的な丘陵を走る雄大なコースであります。

料金　南北兩線共（片道）一圓　所要時間（南線）一時間二十分（北線）一時間三十分　發車時間　三十分毎

◆旅　順（人口三萬四千人　內地人一萬三千人）

「鐵血山を覆ふて山形改る」

旅順は今更申す迄もなく世界戰史上稀な激戰地で、祖國の爲に斃れられたる吾が勇士の眠れる聖地であつて、一本の草木、一塊の土石と雖も皆勇士の血に依つて染められた山である。親しく現地に當時の勇士の苦戰の跡を訪ぬるとき、誰しも感謝の念に打たれ感激の涙を催すであらう。私達は興亞精神體得の大陸道場として是非共一度は訪ぬべき土地である。

「踏石を心して見よ旅の人」

心をして昔を忍び我が踏石をじつと見凝めるとき、其の上には血みどろな勇士の姿を見出すことが出來る。其の姿をしつかりと胸にえがいてその石一片を土產にするときは、生涯朽つることなき記念品ともなり、永遠の語り草ともなるであらう。

「戰蹟廻りの順路」 旅順の戰蹟廻りは、一般に馬車及觀光バスを選ぶ。馬車は四人まで乘り得るが窮屈であるから、二人乃至三人が適當である。

イ、二　日　行　程

第一日…閉塞隊記念碑—白玉山—博物館—大正公園—大案子山—二〇三高地—港口

第二日…博物館記念館—東鷄冠山北堡壘—望臺—盤龍山—二龍山—松樹山—水師營—露國墓地

ロ、一日行程…白玉山表忠塔—戰利記念品陳列館—東鷄冠山北堡壘—水師營—二〇三高地—博物館

ハ、半日行程…A…白玉山—博物館記念館—東鷄冠山北堡壘

B…白玉山—二〇三高地—博物館

☆表忠塔の內部に入るには表忠塔事務所に申出のことゝなつてゐる。

△**戰蹟案內**　關東州戰蹟保存會と大連都市交通バス旅順營業所でもバスによる團體客に對しては無料で案內に從事してゐる。

△**旅　館**

滿鐵直營ヤマトホテル

眺望絕佳、黃金臺の海邊にあり、避暑避寒に理想的なホテルである。

（米式のみ）宿泊料　九圓—一二圓

聖地會館（白玉山麓）宿泊料別揭參照のこと

旅順ホテル（舊市街青葉町　宿泊料　七圓—三圓）

防長館（同青葉町　宿泊料　五圓—二圓五十錢）

賓來館（乃木町　宿泊料　五圓—二圓五十錢）

△**聖地會館**

聖地會館は、來旅團體の便を圖り、旅順市が十數萬圓を投じて白玉山麓、風景絕佳の地を選び建てた宏壯なもので、屋內は大中小の諸室を始め、應接室・新聞閱覽室・土產品販賣所・食堂浴場等完備し、又講堂は數百人を容るゝに足り、正面に東鄕・乃木兩神社の御分靈を奉祀し、眞に精神道場としての偉容を備へて居る。

宿泊料（一泊二食附）小學生　〇・八〇、中等、靑年學校生徒及現役陸海軍下士官兵　一・三〇、專門學校、大學生及現役陸海軍准士官　一・七〇、普通團體及陸海軍現役將校其の他　二・〇〇

△**土　產　品**

鶉粕漬（冬期間のみ）戰蹟煎餅、忠勇あられ、高粱おこし、同しるこ、記念火箸、繪葉書、なつめ羊羹等

◉支那料理と芝居

【1】支那料理

「支那料理を食ひ、日本の女を娶つてスイスに住みたい」。といふ言葉は人間最上の慾望を表はしたものだといふ。支那料理は五千年の歷史を有する民族の舌から生れた味の粹である。俗に「三世衣を知り五世味を知る」といふ。名家になると三代も五代も續いた世襲譜代の料理人をもつてゐる。そして主人が生れた時からの嗜好をちやんと心得てゐる、且つその家自慢の料理を親から子、子から孫へと祕傳を口傳してある。そして賓客を招待するときは累代研究した腕を揮ふのである。

五代もかゝらなければ眞の味の判らぬといふ支那の料理を、變遷の甚だしい日本に比べると、五代はおろか三代も續く家は地方の大豪家以外には殆んどないから、この國民から云はすれば、日本人は永久に味を解し得ない國民といふことになるかも知れない。

十年、二十年支那料理を味つても、まだ支那料理の門口を覗いたといふ程度に過ぎないらしい、それほど歷史的にも又味覺的にも複雜な支那料理である。

西洋東洋の別なく、料理の上に表はれた人間の感覺は、餘程複雜

なものである。食慾を支配するものは第一に味覺であるが、高等の料理になると決して味覺のみの問題ではない、嗅覺、聽覺、視覺の刺激を滿足せしむるところに、料理としての最上の効果があるのではあるまいか。支那料理はこの意味に於て他の何れの料理よりも發達してゐる。日本料理は容器に數百年の傳統を誇り、色彩の配合又目を欺くばかりで、冷熱の順序を考へてあり、まことに視覺から來るものはあるとしても、他の點に於て支那料理に及ばないであらう嗅覺から觀れば何れの料理も香料を用ひる。また聽覺や觸覺に訴ふるものは齒ざはりや、口ざはりのよい材料であることを條件とするさて、これ等の條件を具備するもので、テーブルコースに於て巧みに配合調和をしてあるのは、支那料理の右に出るものはない。

支那料理を食へば食ふ程、支那人が如何に味覺に對してデリケートであるかを知る、彼等が持つ五千年の歴史、その文化のやうに複雜極まるものがこの支那料理である。

南滿各地に於て一テーブル十二人位一人約五圓位で味はれる。

（詳細は滿鐵發行觀光叢書第八輯支那料理ノ話參照）

【2】支那芝居

滿支人といふことはこゝでは滿洲及北支に住んでゐる漢民族（普通の支那人）のことを意味する。彼等は一般に非常に芝居を好み、或意味から云へば芝居は彼等の生活の一部分とも云つて好い程に深い關係を持つてゐる。階級の上下を問はず芝居を觀ることが好きであるばかりでなく、自分で芝居の好いところを唱ふものが少くない

元來支那には日本のやうに一般民衆の唱ふ歌が殆ど無いので、民衆は芝居の一節を唱ふことに依つて日常の歌に代へてゐる。商店の小僧や勞働者などが道を歩きながら氣持よさそうに唱つてゐるのは大抵その芝居の一節である。

現在行はれてゐる芝居には色々種類があるが、大別して京劇、評戯、梆子、崑曲の四種に分けられる。これは音樂に依る分けかたであるが、地方的に分けると北京劇と上海劇とに大別される。

（詳細は滿鐵發行觀光叢書第七輯支那芝居ト寄席ノ話參照）

附錄

—滿鐵社員會發行「滿洲鐵道秘話」より拔萃—

◉滿洲事變の發端中村、井杉兩志士の遭難

兩勇士遭難の端緒をつかむ

昭和六年七月十九日安達驛附近の農業調査に出掛けてゐた滿鐵技術員のA君は、其の歸途昂昂溪に立ち寄つて昂榮館旅館を經營してゐる友人井杉延太郎君の留守宅を訪れた。

夫れは中村少佐を案内して蒙古の奥地に出掛けた友人の井杉君が豫定の日よりもう二十日も遲れてゐるのにまだ歸つて來てゐない、と云ふことを聞いたからであつた。

奥さんに會つて見ると哈爾濱の特務機關からも少佐が心配して來てゐると云ふ、直ちに別屋でB少佐に會つて色々相談した結果洮南と伊列克特の兩方面から捜査隊を出すことにしてA君はその夜の二時に齋々哈爾の自宅へ歸つたのであつた。

玄關に出迎へたA君の奥さんは思ひ餘つた調子で

——れえ妾變な話を聞いたのよ—と冒頭して話しかけた。

——變な話つてどんな事だい？

——どこかで日本人が二人殺されたらしい、といふのよ。

思はず胸をつかれたA君は訊き返へした。

——誰から聞いたんだ!?

——長野のお内儀さんからよ。

長野のお内儀と云へば以前は春廼家に出てゐて今のカフエー一富士を經營してゐる人である。時計を見れば既に夜中も二時半、いくらカフエーでも今から彼女を訪ねるわけにも行かない、落ちつかぬ氣持を抑へてその夜は其の儘床に入つた。

カフエー「一富士」

その翌朝まだ閉つたまゝの扉を叩いてA君は「一富士」のお内儀に會つて見た。

——實は家内から聞いて來たのですが、何處かで日本人が二人殺されたらしい、とか、それは本當でせうか？

——ハアでも、夫は眞實ですかへどうか唯、お客さんが、そんな噂をしてゐたものですから——。

——その御客さんと云ふのは誰でせう？　御存知でしたら是非教へ

て下さい。貴女には決して御迷惑はかけませんから……。
——それが稀に見える御客さんで顔は存じてゐますけれど、御名前はつい伺つたことが御座いませんので……。
——女給さんで誰か知つてゐる人はないでせうか？
——サアれえー。
——誰かに訊いて見て下さいませんか。
A君は眞剣な態度に引きかへて内儀は何故か煮え切らない、ぢり〳〵と昂ぶつて來る氣持を抑へながらA君はもう一度繰返した。
——如何でせう何とか、訊いてみて頂きませんでせうか？
併しお内儀の返事は同じ樣に煮えきらなかつた。かうして二人の間に重苦しい沈默が一時間も續いた頃、主人が奥から起されて來たA君は早朝から訪れて來た事を詫びて來意をハツキリと打ち明けると、主人は傍からお内儀に向つて、
——何もお前が隱すことは無いだらう、知つてゐるのなら、ハツキリ話して上げたらどうだ——。と口添へした。
お内儀も主人に言はれて澁々口を開いた。
——お店の客と申しましたけれど、實は以前から知り合ひの王と云ふ連長からです。
——一體何處で聞いたのです？　お店で、ですか？
——いゝえ永安里で……（註、永安里は齊々哈爾にある滿人の遊廓である）
——それで殺された場所は何處と言つてゐました？
——何でも西の方らしかつたのですが判ツキリ何處とは申しませんでした。
——殺した人は？
——誰ッて判ッキリ言ひませんでしたが、話の樣子では王らしいのですけれど——
——その男は何處に居ます？
息もつかせずA君は追求した。
——サア、何處に居ますか?!　喋つたら殺す、と言つてゐましたけれど——
お内儀は恐しさうに肩をすぼめて身慄ひしたが、其の姿態には何處か空々しい所があつた。A君は知らぬ顔をして更に追求し續けた。
——王に會つたのは何時です？
——一昨日の夜でした——。
——貴女が王と話をしてゐる時傍に人が居ましたか。
——二、三人居ましたので王と筆談をしたのです。
お内儀は不用意に口を辷らしてしまつた。
——確に筆談をしたのですね。
言ひ直す暇もなくA君に念を押されて、お内儀は——ええ——と

仕方なげに承認した。
——その筆談に使つた紙はどうしました？
——サア、それは……
お内儀は一寸言ひ淀んで
——その場で王が燒いてしまひました。
——そうですか、と、さりげなく受け答へたものゝ、先刻からお内儀の態度に不審を抱いてゐたA君は、默つて二人の話を聞いてゐる主人には惡いと思ひながら、重ねて威壓するやうな調子でお内儀に押つかぶせた。
——嘘でせう！　貴女も日本人の女なら隱さずに言つて下さい。私は物好きでこんなことを訊いてゐるのではないのです！
——あゝ、妾どうしませう？
流石にこの言葉はお内儀の胸に應へたらしい。A君の兩眼にも激しい眞情の涙が光つてゐた。
——王に、殺す！　と言はれて、竟ひ隱してゐたのですけれど——
と言ひ乍ら、お内儀は奥に入つて、一度は燒き捨てたと云ふ筆談の紙を持つて來た。慄える手で擴げて見ると、それには洮南の奥らしい略圖が描いてあつて、その側に、山根咲三（山根佐喜藏）といふ男が死んでゐる。そして、日本式の拳銃を持つてゐた。大金を眞綿に包んで持つてゐた、馬から卸されて殺されて燒かれた、と言ふ樣なことが斷片的に書かれてあつた。山根咲三（佐喜藏）とは中村、井杉兩志士と前後して蒙古の奥に出掛けた人だ。假令、中村少佐一行のことではなくても、これをその儘に捨てゝは置かれない。A君はその晩、すぐに洮南に出かける事にして先づ齊々哈爾領事館にC領事を訪れた。

眞相を追求して

C領事に會つてその力添へを期待したA君は、結局何の期待も得ずに領事館を出た。そして直ぐ其の足で宮崎機關長に電報を打ち、そのまゝ洮南に直行した。
洮南に著いてみると死んだ筈の山根君がゐる。
——中村少佐の一行に君の護照を貸したかれ？　と尋ねると、
——僕は貸さないよ、どうしてだい？　と却つて不思議さうに訊き返す。そこでA君は「一富士」お内儀から訊いた話を傳へると山根君は急に聲を落して
——實はね、この二、三日前から、蘇鄂公府の附近で日本人が二人殺された、といふ噂を聞いてゐるので、僕もそれを確めに行かうと思つてゐたところだ。君の話も、キツトそれだよ。
——では、やつぱり、中村少佐と井杉曹長かな？
——どうも僕は、そう思ふんだ！
——それでは昂昂溪に哈爾濱のB君が來てゐて捜索隊を出すことに

なつてゐるから、すぐ呼び寄せて一緒に相談しよう。

A君はずぐ昂昂溪のB君に電報を打つと同時に、哈爾濱の宮崎特務機關長にも

「中村、井杉、虐殺されたる模樣、場所ほゞ判明す、捜索隊の出動を見合はせられたし」と打電した。

その夜遲くB君が來たので、早速、三人で相談した結果、山根君は取敢へず遭難現場へ調査に行くこと、A君は今一度「一富士」のお内儀に會つて、極力、王の居所を突き止めること、B君は洮南に殘つて各地との連絡に當ること、尙遭難確證の手に入るまで、井杉の奥さんにはこのことを知らせないことに打合せした。

齊々哈爾に引き返したA君は、お内儀を社宅に呼びつけて色々と聞いて見たが、どうしても話の辻褄が合はない。何とかして本音を吐かせやうと焦り乍ら見るともなく筆談に使つた紙を見てゐると、ふと、その文字が女の筆跡であることに直感した。

——貴女はこれを王が書いたと云つてゐるけれど、隱しても駄目です。これは女の手ではありませんか！

その瞬間、内儀の顏色はサッ！と變つたが、併し依估地の女はまだ默つて俯むいてゐる。その委を憎々し氣に睨みつけてゐたA君の頭に、ふと又新しい事實が浮び出て來た。それはこの内儀が、まだ春廼家から出て來た當時の女友達が王と云ふ支那人の女房になつてゐることである。これだ！ と直感したA君は

——貴女は一體日本人か！ 王が連長だなどゝ嘘ばかり言ひ張る。王は貴女の友達の主人ではないですか！

A君の直感は見事に當つた。それまで執拗に默り續けてゐたお内儀も遂に隱し切れなくなつて、

——申し譯ありません。實はお筆さんから堅く口止めされてゐたものですから——と詫び乍ら今度は素直にありの儘を話し初めた

それに依ると、王といふのは、A君の想像した通りお筆さんの主人で蒙古商人であるが、三週間許り前に蒙古から歸つて來る途中、蘇鄂公府で日本人が二人殺された、と云ふ話を聞いて來て、それを女房のお筆さんに話した。その時、他人に話すと殺されるから絶對に口外してはならぬ。と堅く口止めされてゐたのを、口の多いのは女の常で、お筆さんは遊びに行つた話の序に、それを「一富士」のお内儀に筆談した。お内儀は又その話を作りかへてA君の奥さんに話したのである。

そこで今度は王の居所であるが、それは城内であると聞いて、危險を冒してその家を訪れてみると、王は一箇月許り前に何處かに引越した、といふ。家主を探して、その引越先を聞いて見たが日本人には敎へる事が出來ない、といつて斷られた。それを宥めすかしてきいてゐると、物見高い彌次が集つて來て、口々に東洋鬼！東洋鬼！と騷き出した。

當時は排日の絶頂であつた頃であるから、うか〳〵してゐると又大變なことになる。仕方なく一應引揚げて、今度は孫といふ十年來使つてゐる親爺に賴んで家主を訪問させ、やつとのことで王の居所を突き止めた。

王の家へ行つてみると、折惡しく王は不在で女房のお筆さんがゐる。そこでA君は

——實は長野のお内儀から聞いて來たのですが——と言ひかけるとお筆さんは狼狽ててA君の口を抑へて

——そんなことを言ふと、私達夫婦は殺されて終ひます。後生ですから早く歸つて下さいと口にも出せず紙に書いて出した。A君は

——大丈夫です。貴女夫婦の一身は必ず引受けるから、私の社宅に御出なさい。そして貴女も日本人の女ですから、隱さないで、日本の爲に本當のことを聞かせて下さい、と紙に書いて渡すとお筆さんは

——駄目です。支那の兵隊は何をやるか解りません。それに此處には日本の兵隊は居りませんから、社宅に行つても直ぐ殺されて終ひます、と書きながら顫えてゐる。

そこに王が歸つてきたが、王もどうしても言はうとしない。仕方がないから、若しお前が本當の事を言へば百圓やるが如何だ、と金で釣つてみると、生命がけのことだから二百圓呉れ、と言ふ。やるから早く話せ、と言へば、直ぐ現金で呉れ、と云ふ。それでは此處には持合せて居ないから社宅まで來い、と言ふことになつて、都合よく王を連れ出し、社宅で約束の二百圓を渡すと、王は

——丁度、私が蘇鄂公府の飯店で朝食を攝つてゐると、二人の日本人が屯懇兵に連れられて來て、飯を食ひ終ると出てゐつた。飯店の主人に訊いてみると、今の日本人は軍事探偵で、今日銃殺されるのだが、若しこの事を他人に喋るとお前も殺されるぞ、と嚇かされました、といふ。

それから、A君の質問に答へて王は知つてゐるだけの事を皆話した。

これで兎に角、中村、井杉兩士の遭難は確められたが、併しこの事實を張學良の目前に突きつけるには、尙それを立證する何かの物的證據が要る。そこで、何とか、それを捜し出して呉れないか、と王に相談してみると、あと三百圓呉れゝば、蒙古人を使つて、どうにかやつてみませうと答へる。そこでA君は、

——證據物件一箇について五十圓、二人の死骸を埋めた場所を探し出したら百圓、虐殺の現場を見たものか、又は直接手を下した屯懇兵の一人を生證人として連れて來たら五百圓出さう——と言ふと、王は必ずやります、と堅く約束して歸つてゐつた。

A君はすぐこの話の顚末をB君と哈爾濱の宮崎特務機關長に通告したが、B君からは、その翌々日、洮南から連絡があつて、蘇鄂公府は警戒が極めて嚴重で、日本人は到底近づけないから山根君も殘念ながら引き返してきた。ついては是非王を督勵して至急現場に行くやうに取計つて貰ひたい、といふ。孫を連れてA君は再び王を訪れてみると、お筆さん一人出て來て、王はもう蘇鄂公府に發つた後であつた。

秘策

A君はお筆さんの前に坐つて、眞剣に賴み込んだ。

——支那人の奥さんになつてはゐても貴女は日本の女だ。是非日本の爲に一肌脱いで欲しい、幸に支那語は御手のもの、支那人生活にも馴れてゐるから、貴女がやる氣ならキットうまくゆく。王さんと一芝居打つて、是非生證人を一人連れて來て下さい——。

初めは容易にA君の話に耳を傾けなかつたお筆さんも、聲涙共に下るA君の至誠に動かされて

——それでは、やつてみませう！　と、その日のうちに直ぐ汽車で王を追つて出掛けた。それから五日餘り、今日か、今日か、と待ち焦れてゐるA君の前にひよつこり王が歸つて來た。そして

——實は蒙古人を傭つてあちら、こちら、と探した結果、死骸を埋めた場所はハツキリ突き留めましたが、肝心の證據物は、何分にも

死體を初め何もかも燒かれてしまつてゐるので、これ丈しか手に入りませんでした、と言つて、死體を埋めた場所の地圖と硝子製の藥瓶一箇を取出した。この藥瓶こそ携帶藥品のケースで、紛れもなく中村少佐の持物であつた。そこで約束の三百圓と、懸賞金の百五十圓を渡すと、王は更に言葉をついで、

——日本式の拳銃と、時計を、隊長と、副隊長が持つてゐることを突き止めたのですが、どうしても手に入れる事が出來ませんでしたと、如何にも殘念そうに繰り返しながら——生證人の方は家内がうまくやつてゐますから、二、三日中には洮南まで連れて來るでせう。ついては家内の智慧で、相手の男には、——こんな田舍に居るよりも、妾は兄さんから七千圓ばかり財産を分けて貰ふことになつてゐるから、二人で一緒に奉天に出て店でも開きませうといふ風に話をもちかけてありますから、貴方は洮南に來て、その兄といふ男に成り濟まして下さい、と笑ひ乍ら言ふ。承知したA君は、洮南での會合場所を王と打ち合はせた上直ぐ宮崎特務機關長にその旨打電して、その翌日の汽車で洮南に向つた。

それから二日目の夕方、A君、B君、山根君の三人が約束場所に待ち合せてゐる所に、お筆さんが眞黑な顔の一見して馬賊を想はせるやうな二十六、七の見すぼらしい背の高い一人の男を連れてやつてきた。

屯懇兵で、中村、井杉兩志士を銃殺した一人である。お筆さんは眞面目くさつて

——この人が私の兄で、此處まで妾を迎へに來て呉れたのです。と

A君を紹介した。A君も

——妹から色々聞きました。この通り、何んにも解らぬ女ですが何卒行末永く可愛いがつてやつて下さい。

と調子を合はせて挨拶した。隱の部屋では、B君と、山根君と、王の三人が、ジツト可笑しさを抑へて聞いてゐた。

併し奉天の特務機關に引き渡すまでは絶對に大事な生證人だ。そこでA君は更にお筆さんと口を揃へて

——そんな服裝で奉天にゆくのも困るから——と、新らしい詰襟の洋服と帽子と靴とを買つて男に與へた。日本の女と、大金の夢とでスツカリ有頂天になつてゐる男は、今度は時計と指輪が欲しい、と言ふ。これも大事の前の小事である。勿論快く買つてやつた。

尙途中で逃げ出されては大變なので、こゝで又一つ、苦肉策を考へ出し、お筆さんに言ひ含めて、足がどうにかやつと這入るほどの小さな編上靴を買つて與へて、これが今の流行で、貴方には本當によく似合ふから是非これを履きなさい、と男を煽てゝそれを履かせた。これさへ履いて居れば、假令逃げ出しても一町と行かない内に足が痛んで歩けなくなることは必定である。それを履いて、痛さに顏をしかめ乍ら、お筆さんと二人並んで得意然と馬車を驅つてゐる男の恰好に、流石のA君たちも吹き出して了つた。

斯うしてやつとその夜の終列車の二等に乘り込むと、その男を中にしてお筆さんとA君が席を取り、A君と山根君が王を連れて、他人顏にそれを圍んで坐つた。

鄭家屯に著くとこちらから打つた電報で、日本の憲兵が二人待ち合はせてゐた。併し幸福に醉つたこの男は、お筆さんに寄り掛つたまゝ、甘い夢路を辿りつゞけて、奉天へ着くまで、遂に眼を開かなかつた。

それから三日目の午後、王夫婦を入れたA君たち五人は、國際列車で齊々哈爾に向つてゐた。豪快な半面に剽輕な性格のB君は、純の純さを痩我慢しながらお筆さんと歩いて行く男の眞似をして皆を爆笑させた。その笑ひの後でお筆さんは、

——鬼の目にも涙と言ひますけれど、別れるときに、あの男が眼に一杯涙を溜めてゐるのを見たときは、何だか可哀想な氣もいたしました——と、しんみりつけ加へた。

かうして動かし得ない生證人と、物的證據と、燒却した死體を埋めた現場の地圖とを突きつけられて、遂に張學良は最後の切札である滿洲事變の端緒を開いたのであつた。

業務案内

一、滿鮮支案内所は南滿洲鐵道株式會社及華北交通會社が「日本朝野の大陸への認識を求め之が旅客又は貨物の輸送の便宜を計るため」に設けてゐる國策的奉仕機關であります。

一、鮮滿支地方の產業經濟、交通其他事情紹介、旅行の斡旋、旅行案内記贈呈、鮮滿支荷物運送及通關に關する說明を無手數料で致します。

一、鮮滿支事情の出張講演、映畫會展覽會資料及映畫の貸出、刊行物に依る紹介宣傳を無手數料で致します。

一、鮮滿支案内所は小樽、東京、大阪、名古屋、新潟、敦賀、門司、下ノ關、長崎の九都市に在り小樽は北海道、樺太を受持區域として前掲の業務を取扱ひ致します。

◆滿鐵鮮滿支案内所◆

小樽	稻穗町東六丁目電	四七五〇 四七五一
東京	京橋區銀座二ノ一 電京橋	二八二一 二八二二 二七二七 二七二七
大阪	東區堺筋安土町 電本町	一七〇一 一七〇四 一七〇八 一七〇八
名古屋	中區榮町一ノ一〇 電本局	四七一一 四七一二 四七一三 四七一四
新潟	古町通六電	二七八八 二九三九
敦賀	驛前大通電	四一八
門司	門司稅關前電	二一一三 二四七七 三一四〇
下關	下關驛前電	一九六二
長崎	萬屋町七九電	四七八八

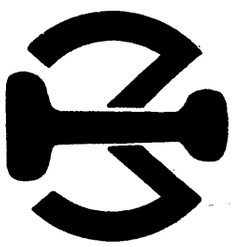
昭和十六年八月二十三日 印刷
昭和十六年八月二十八日 發行

發行人 小樽市春日臺 白川義隆

編輯人 小樽市綠町三ノ八 城畑晄人

發行所 小樽市稻穗町 滿鐵小樽鮮滿支案内所

印刷人 小樽市稻穗町東六ノ四 永井新次郎

印刷所 小樽市稻穗町東六ノ四 株式會社太陽舍印刷所

所內案文滿鮮樽小鐵滿